

翻訳と異文化コミュニケーション  
— 「いき」と「甘え」の翻訳可能性をめぐって

張 昌 玉

## はじめに

中国国内における中日翻訳および通訳者の需要はすでに供給を超えている。両国間の経済的交流と人的交流が幅広く進められるにつれ、中国社会は優秀な通訳人材を数多く必要としている。民間における翻訳・通訳養成機関も現れており、大学でも翻訳・通訳専攻といったままでなかった専攻分野が現れた。社会の需要とともに今後多くの人がプロの翻訳家・通訳を目指して検定試験を受けることになるだろう。2004年から実施されている国家翻訳・通訳検定試験は中国社会のこれらの人材に対する需要度を物語っている。

中国語を日本語に訳の場合、日本語がうまければ翻訳家または通訳になれると思いがちだが、優秀なプロにはこれに賛同しないだろう。日本語の習得だけではプロの訳者にはなれるまい。異文化コミュニケーションという目に見えない文化的要素を抜きにしては、ハイレベルの翻訳・通訳はありえないのである。

コミュニケーションとは情報の伝達や情報の交換、相互交流、相互理解といった意味合いがある言葉としてよく使われている。異文化のコミュニケーションにおいて重要な要素は、相手の文化をどれほど理解しているか、相手の文化についてのどのように評価しているか、批判的なのかそれとも肯定的で尊重しているかがスムーズなコミュニケーションをとる上で肝要なことである。

翻訳家・通訳者は異文化コミュニケーションの達人でなければならない。そこで翻訳家・通訳者になるためには外国語をマスターすることはもちろんのこと、相手の文化をどれほど理解しているかによって訳文の質とレベルが決まるので、異文化理解のための努力や学習は大いに必要であると思われる。

翻訳・通訳は語学の力だけでは務まらない。言葉の問題以上に異文化に対する知識と理解、そして異文化適応能力と感受性などをも持ち合わせなければならない。

本稿ではこういった問題意識を持って、翻訳とコミュニケーションの問題を「いき」と「甘え」を例に考えることにする。

### 一、翻訳の概念と翻訳作業

翻訳はある種の言葉を別の種の言葉で表現する過程の中で、異なる言葉の間に立って、ある種の言葉を同質、同等の内容ないし意味を別の種の言葉に表現する作業である。つまり翻訳はある種の言葉の情報を別の言葉で伝達するものである。ここで強調されるのは訳文が原文と同質、同等の意味を表すものでなければならないということである。そこで翻訳におけるテクニックとして、原文の構成、語彙、文型の上下関係を正確に把握した上で、最も適切な訳文に原文を復元するということが強調される。

しかし、この作業に入る前にまずしなければならないことは、原文の内容と関連する知識、社会、歴史的背景を理解することであろう。文学作品の場合はさらに作品の中の心的状況、言葉を通して導かれる精神的、思想的目的を理解する必要があるが大いにいる。これが翻訳という作業に入る前の前提となる。これに対する十分な把握が良質の翻訳に繋がるから

である。しかし、原文は必ずしも論理的にはっきりして、因果関係もはっきりした文章とは限らない。

特に日本語は非論理的な場合が多く、日本語学習者は学習段階において、これを理解し、身に着けることに四苦八苦している。日本語には論理的に希薄であり、それとは異質な感情的論理とでもいうようなものが多いといえる。たとえば川端康成の『雪国』の冒頭の一文に「夜の底が白くなった」とあるが、中国語には「夜」に「底」とか「尾」はありえないのである。こういう非論理的な表現に日本語の自由無碍な魔力があり、これも日本語を中国語に訳す場合、困難とする要因の一つでもある。翻訳家の悩みと言えれば原文の内容を十分に把握しながら近似する適訳語が頭に浮かんでこないことである。これに加えて、論理にかけている日本語を理解し、その適訳語を見つけることは至難のわざともいえるのである。

しかし、この理解に苦しい日本語を単に日本語の文法構成の問題として捉えることはできないと思われる。というのは日本語という言語は大和民族の思想を反映しており、この民族の感情や、精神または心を表現する手段であるからである。ようするに日本の文化の現われであるといえるからである。そうすると、日本語を中国に訳す場合、最も悩ましいことは、言葉の問題というよりも、日本語が意味するもの、言葉に内包された意味と感情、精神、意図などを理解することが困難であると言う問題にたどりつく。

これはいわば異質な文化にたいする違和感と戸惑いである。冒頭で筆者は、翻訳家は異文化コミュニケーションの達人でなければならないと述べたが、この問題は翻訳における核心的な問題といえる。次に具体的にどういいう日本語が最も翻訳者を悩ませる問題なのかを考察し、異文化間の翻訳可能性について考える。

## 二、日本文化を象徴する「いき」とその翻訳可能性

日本文化といえばさまざまなものが頭に浮かぶ。われわれが真っ先に頭に浮かぶのは茶道、華道、着物、歌舞伎、三味線、お祭り、いつでもどこでも頭を下げてお辞儀をする姿であるが、ここではこういった類のものではなく、日本文化の真髄と言われる「意気」について、中国人翻訳者がこれに対する理解と中国語での伝達困難について述べる。

「意気」とは、広辞苑には次のような説明がある。①きだて。心ばえ。きまえ。②気力。気合。気概。いきごみ。③意気地のあること。心意気。また「意気」から転じた語に「粹」がある。「粹」は広辞苑に「①気持ちや身なりのさっぱりとした垢抜けしていて、しかも色気をもっていること。②人情や裏表に通じ、特に遊里・遊興に関して精通していること。遊里・遊興。」と載っている。また九鬼周造はその著書『いきの構造』の中で次のように述べている。

ようするに「いき」とはわが国文化を特徴付けている道徳的理想主義（武士道の意気地）と宗教的非現実性（仏教の諦め）との形相因によって、質料因たる媚態が自己の存在実現を完成したものであるということが出来る<sup>1)</sup>。これらの説明を見ても翻訳者ははっきりしたイメージが浮かばないだろう。この一語に奥深い一民族の内なる体験による物事に対する認識レベルが内包されていると筆者は思う。

九鬼は同著でまた次のように述べている。「いき」とは東洋文化の、否、大和民族の特殊の存在様態の顕著な自己表明の一つであると考えて差し支えない<sup>2)</sup>。この「意気」を中国語に訳す場合、その意味内容と同価値のものは当然見当たらないのである。ではこの「いき」の移出または移植は果たして可能だろうか。これは、異文化コミュニケーションつまり異文化間の対話を通して、「いき」の内包を見せてくれる作業が必要だろう。文化ということばはだれでも安易に口にするところがあるが、実はみんなが思ったほど安易で、たやすく解釈できるものではないように思える。

ベネディクトは『菊と刀』の中で、個人生活史は何よりもまず、自分の共同体で伝統的に受け継がれてきた型と基準への順応である。その中へと生れ落ちた慣習が誕生の瞬間から、その人の経験と行動を形成する。話せるようになるまでに、その文化の小さな被造物となっており、さらに成長して、その諸行動に参加するようになると、その文化の性癖が彼の性癖となり、その文化の信念が彼の信念となり、その文化において不可能なことは彼にとっても不可能になっていると述べている<sup>3)</sup>。これは文化とは一つの「型」であり、「枠組み」として認めている。これが故に、異質の文化をもつ同士がコミュニケーションするという場合の困難さが容易に予想できよう。

しかし、人間はそれぞれ異質の文化をもっているものの、人間として共通性が大いにあることも否定できないゆえ、自文化の「型」からはみ出る行動また、発想をまったくできなくはないだろう。特に今日のような情報化、グローバル化に伴って、これらのいわゆる自文化の「型」、または「枠組み」は異文化との比較対照を通して、受容可能な時代になっているのではなかろうか。

今日中国語に日本でよく使われている「営業中」とか「料理」、「放送」といった漢字が日本語の意味とまったく同じ意味で使われている。これは近年に現れた新しい漢字の使い方である。無論これらの漢字は特に日本特有の文化を表しているものではないという特徴により、容易に中国人に受容されたとは言え、グローバル化による異文化の影響を示している。この中で、「料理」という漢字は中国語にもあって、家事を切り盛りするという意味であるが、日本料理の中国進出とともに、これが日本の食事を意味することを中国人は暗黙の了解で、平気で使うようになってきている。そして日本料理屋に入ると、「いらっしやいませ」とか「ありがとうございました」という日本語が飛び交う。また、日本のアニメやドラマ、音楽などによる日本文化の浸透ははなはだしく、その影響力も計り知れないものがある。

こうして、文化は徐々に浸透し、理解されていくのだろう。中国人はこれらの体験を通して、異文化と対話し、身をもって感じ、理解を深めていくうちに、自文化の「型」から身をずらして、異文化の受容度を広げていくことは十分可能であり、こうした中で、日本語における「意気」のような、純粋な日本文化の内包をも理解し、それに最も近い中国語の訳語を見つけることができると思うのである。

また日本の浮世絵や俳句、連歌、浪曲や文学作品、映像などを通して、絶えず日本文化の内在的精神と日本の美的感覚を披露し、解釈し、輸出する努力が必要であろう。これがコミュニケーションであり、対話であり、理解の前提である。これによって中国語に翻訳する場合十分な理論的予備知識と間接的な体験によって、近似する語を見出すことができるのであろう。これは訳者にとって省くことのできない下積みであり、翻訳家になる前提で

あるとっていいほど、重要なものである。

### 三、「甘え」の心理的様相についての翻訳可能性

日本語の「甘える」という言葉を中国語に訳そうとした場合、大変厄介であることに気づく。これも「いき」と同様にこれにぴったり当てはまる同等の訳語が見つからないからである。「甘え」という言葉は日本語に特有なものとして、日本人の心理の特異性を表すことばである。英語にもこれにぴったりした訳語が見当たらないようである。

土居健郎は『甘えの構造』の中で、次のように述べている。甘えという語が日本語に特有なものでありながら、本来人間一般に共通心理的現象を現しているという事実は日本人にとってこの心理が非常に身近なものであることを示すとともに、日本の社会構造もまたこのような心理を許容するように出来上がっていることを示している。言い換えれば甘えは日本人の精神構造を理解するための鍵概念となるばかりでなく、日本の社会構造を理解するための鍵概念ともなるということが出来る<sup>4)</sup>。

甘えという言葉がこれほどの重要な意味をもつことばであるとは、異文化の人間にとっては到底理解しがたいことであり、これを中国語に訳した場合、果たして日本語の甘えの内包を同等の価値の言葉に中国語で表現できるものなのかと疑いたくなるほどである。無論この著書は中国語に訳され出版されている。中国語に訳された著書のタイトルを日本語に再度訳しなおした場合「日本式の愛——日本人の愛に頼る心理行動分析」となる。愛に頼るという意味を中国語で「依愛」と訳し、表現しているが、これは普通使われている中国語ではなく、漢字からその意味を推測するしかない訳語になっている。土居はまた同著の中で、ある国民の特性はその国語を習熟することによってのみ学ぶことができよう。国語はその国の魂に内在するすべてを含んでおり、それゆえにそれぞれの国にとって、最上の投影法なのである<sup>5)</sup>。と述べている。

だとすると、ある国民の特性を理解するためには、その国の国語を習熟しなければならないことになる。日本語学習者が日本語を単なる語学として学ぶ場合、ほとんどの場合、日本語の文法や構造、文型、言葉の意味を先生の指導の下で習得していくのが普通である。しかし、言葉は生きているため、辞書による説明と教科書による説明だけでは、到底一国の「魂に内在するすべてを含んでいる」国語を習熟することはできないのである。そこで日本語を中国語に訳すという極めて困難な仕事を完成するためには、語学知識だけを頼りにしては務まらないだろう。異質な文化を有する国民の心理をいかにしたら理解することができるかを研究し、工夫する必要があるが大いにある。

こうした異質の文化を理解するにあたり、コミュニケーション、対話は欠かせないものであるが、ベネディクトの徹底的な比較による日本文化への驚くほどの理解は異文化理解のための方法を示してくれている。特に翻訳に携わるものは、日本文化を自分たちの生活する空間とはまったく異質な異国趣味として好奇心をもってコミュニケーションを図ったり、異文化間を行き来するだけでは、この不可解な「いき」とか「甘え」といった日本特有の特性を理解することができないだろう。ベネディクトはわれわれに手本を示してくれている。ベネディクトは戦争という事情から日本に来て日本文化を直に体験したり、現地

調査することができなかったが、伝説、映画、日本人の亡命者および捕虜とのインタビュー、学術著書、新聞記事、ラジオ放送、古文書、小説、議会講演、軍の機密情報などを手がかりに、自文化と徹底的な比較を通して、研究を行い、驚異的な異文化理解の著書を残すことができたのである。これには違和感に満ちた異文化に対し、自文化を基準にして異文化を判断するのでは異文化の傍観者に過ぎず、異文化の理解者にはなれない。異文化に身を投じ、そこに身をおく強靱な精神力が必要ではなかろうか。こうしてこそ初めて異文化そのものに肉薄していくことができ、これが、また良質の翻訳につながるのである。

良質の翻訳の前提となるものは、異文化に対し理解するための努力と研究と工夫である。これが異文化コミュニケーションをスムーズにしてくれる前提にもなるということを強調したいところである。

注) \_\_\_\_\_

- 1) 九鬼周造著『いきの構造』岩波書店 18-19ページ
- 2) 九鬼周造『いきの構造』13ページ
- 3) Ruth Benedict, *Patterns of Culture*, Houghton Mifflin, Boston, 1989, pp. 2 - 3
- 4) 土居健郎 『甘えの構造』弘文堂 22ページ
- 5) 土居健郎 『甘えの構造』6 - 7 ページ

参考文献) \_\_\_\_\_

1. 九鬼周造、『いきの構造』、岩波書店、1979
2. 土居健郎、『甘えの構造』、弘文堂、昭和56年
3. 『国際日本学の構築に向けて』、法政大学国際日本学研究所、法政大学国際日本学研究センター発行、2005年12月